



青木村子どもはつらつネットワーク通信

平成26年度 第112号 1月1日

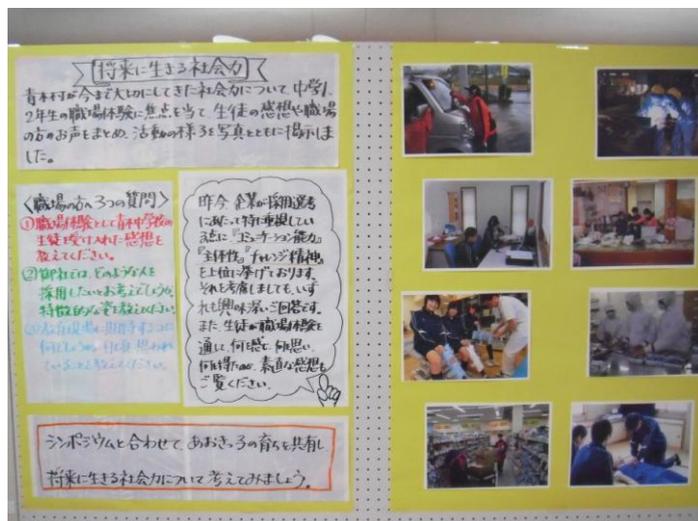
青木村子どもはつらつネットワーク事務局発行

子育てフォーラム青木2014

～将来に生きる社会力を考える～

保小中一貫教育委員会事務局 柄澤俊彦（小学校教頭）

1月29日(土)午後、文化会館を会場に「子育てフォーラム青木2014」が開催されました。120名以上の大勢の皆さんにご参加いただき今年も充実したフォーラムになりました。青木村の教育目標に「社会力」の育成を掲げ、学校・地域・家庭、村全体が力を合わせて取り組んで10年が経ちました。今回のフォーラムでは「将来に生きる社会力」をテーマにあおきっこの子育てについて村民の皆さんと共に考えました。



フォーラム推進委員会では、中学校の職場体験に焦点を当て、職場体験の様子や職場体験を受け入れていただいた企業の皆様の思い、職場体験をした中学生の感想をもとに、あおきっこの社会で生きる姿や社会で求められている資質についてまとめてみました。

開会式では、アンケート委員会よる家庭学習についての現状報告がありました。シンポジウムでは、青木村で義務教育を受けた当時のあおきっこが社会人になろうとする今、村の教育を受けてどのように感じ、活動しているのか、また、社会の企業人の目から見てどのような力が若者に求められているのかをお話いただきました。その後の分科会では、「あおきっ子教育ポイント5か条」「小中の連携」「保小の連携」「特別支援教育」について今年度の実践をもとに、子どもたちの現状・成果・課題等について考え合いました。

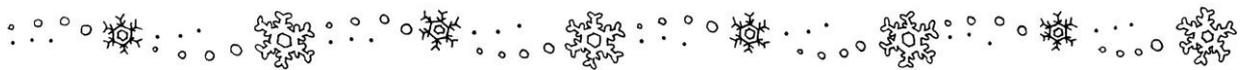
参加者のみなさんの感想を、わずかですが紹介します。

- ・シンポジウムは、なごやかな感じで、とても楽しみながら貴重な話を聞かせていただきました。青木村で育つ若者達の今後がとても楽しみです。親の関わりが、さらに大切であると思いました。（保護者）
- ・多田さんの自発的な行動の話、若林さんの親の思い、子どもからの思い、青木の子どもた

ちはすごい。(村外の方)

- 第2分科会では、小・中学校の様子が良く分かりました。中1ギャップの件、子どもたちは思ったよりもたくましいのだと思いました。(地域の方)
- 今年もとてもためになり、これをどう生かしていくか、自分自身の課題です。(保護者)
- アンケートの結果が、それぞれの学年によってハッキリと分かれていてびっくりしました。説明が付くと、とても分かりやすく良かったです。(保護者)
- 青木村で育ち、教育を受けた子どもたちがどう成長したのか、興味深く聞かせていただきました。教職員が同じ志で、「社会力」育成のために、いかにして教育の質を高め、それを保っていくかが課題だと感じました。(教職員)
- 青木村の素晴らしさを感じる事が出来ました。是非、もっともっとたくさんの人達に、この会に参加していただきたいと思いました。(保護者)

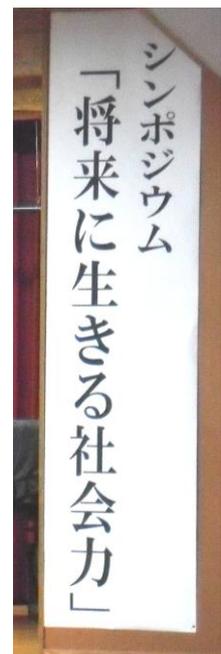
「村をあげて子育て」の取り組みが、将来に生きる力となってきたことを実感できたフォーラムであったと感じています。このフォーラムで、今後も青木村の子どもたちが心豊かに成長していくように、村全体で力を合わせていくことの大切さを確認できたことと思います。「子育てフォーラム青木 2014」に関わったすべての皆様に、感謝申し上げます。ありがとうございました。



シンポジウム 「将来に生きる社会力」 (概要)

シンポジスト	西田 不折さん	(西田技研工業(株)会長、前上田市教育委員長)
	小林 規子さん	(教育委員、保護者)
	多田 彩夏さん	(大学生)
	若林 光太郎さん	(青木村役場職員)
コーディネーター	沓掛 英明さん	(青木村教育長)

沓掛教育長 青木村では、社会力をうたって今年で10年が経ちました。昨年は子ども達に深く関わって下さっている方々をシンポジストとしてお招きし、活動の様子や子ども達の素晴らしい姿についてお話しいただきました。10年経ったということですが、その時の子ども達は社会人になろうとしています。ここ数年の成人式では「青木村の役に立ちたい」「青木村を誇りに思う」という言葉が数多く聞かれるようになってきました。今日は、村をあげてのこの取り組みが若者たちにどのように受け止められてきたのか、また社会を逞しく生き抜く力とはどのような力なのかをお話しいただき、これからの青木村の教育に生かしていければと思っています。



簡単にシンポジストの方をご紹介したいと思います。

まず、青木中学校の時に総合的な学習の時間で、青木村を取り上げて学習を重ねてきた学年の代表として多田彩夏さんです。義民太鼓でも大変に活躍されています。

次は、第一回のあおきっこ合宿に6年生の時に参加された若林光太郎さん。今年の4月に青木村役場に就職され、今まさに青木村のために活躍されています。

3人目は青木村の教育委員でコーディネーターもされています小林規子さんです。保護者の立場から保護者の願いなどをお話しいただければと思っています。

最後に青木村にあります西田技研工業(株)の会長さんの西田不折さんです。上田市の教育委員長さんとして長らくご活躍されていました。

それでは多田さんの方からご自分の体験の様子と、それが今の生活や目標にどのように生きていると思うかをお話しいただきたいと思います。

多田さん 私たちは中学の担任の先生に、「何でもいいから青木村に貢献できることをやってみなさい」と言われました。案を出し合い提案に賛同するものたちが集まって班を作り、3年間活動をするというものでした。1年生の私の頭にまず浮かんだのは、何かを青木村に贈ったらいいのではないかということでした。そこでアルミ缶を集めてお金に換え、何かを購入しようと考え「アルミ缶回収班」ができました。具体的に何を贈ったらいいかは、社会福祉協議会や村役場、教育委員会などに端から電話をかけてお聞きし、AEDを贈ることにしました。アルミ缶を集めるために広報にチラシを入れて頂いたり、各区長さんをお願いして、すべての区にアルミ缶回収箱を置かせて頂いたりしました。2年生の時にその金額に達成し、この場で贈呈式をしたことをよく覚えています。この活動を通して、敬語やお願いの文書作りなどいろいろなことを学びました。設置したダンボール箱が雨でボロボロになったり、洗っていないビンから悪臭が発生したりして苦情がきたこともありました。叱られて泣いたこともありました。活動を通して本当に色々なことを勉強しました。次第に励ましの言葉をかけて下さる方が増え、直接学校に缶を持ってきてくださる方もいて、地域の方に支えられていることを感じました。



私は今大学で教育を勉強しているのですが、友人たちと総合的な学習の話をした時に「班活動をした」とか「花を育てた」というような曖昧な記憶しかない人が多く、私のように自分で計画して、失敗もして、社会の中に出て活動をして、という経験をした人は本当に稀です。

先ほど、成人式で「青木村の役に立ちたい」という言葉が多く聞かれるというお話がありましたが、これは地域の方々が私達中学生を社会の一員として受け入れて下さり、また先生となって教えて下さったからだと思います。そのような地域の方々の姿を見てきたからこそ、青木のために何かしたいとか、地域の大人たちのように子どもに接したいとか思うのではな

いかと思います。

教育長 今まさに、小学校では総合的な学習を通して青木村を誇りに思う授業を展開しているところです。先日も全県の研究授業を行ったのですが、このような子ども達が育っていくことを期待したいと思います。次に若林さんお願いします。

若林さん 先程、あおきっこ合宿の一期生と紹介して頂きましたが、実は当時のことはあまりはっきりとは覚えていません。ただ、とても楽しかったということと大学生がとても大人っぽく見えたという記憶があります。今の自分と同じくらいの年齢だと思いますが、小学生から見たら今の自分はそんな風に見えるのかな、しっかりしなければという気持ちです。具体的に合宿で学んだことの一つとして、とても話しにくいのですが、トイレに行かれるようになったということがあり



ます。それまで学校のトイレではおしっこしかできなくて、それ以外は我慢したり家に急いで帰ったりしていました。合宿中はそれができませんので、一週間の団体生活の中でそんなこともできるようになりました。

今日、合宿中に親からもらった手紙と、僕が家族に書いた手紙を持ってきましたので、少し読みたいと思います。まず、僕が書いた手紙です。「父ちゃんとばあちゃんと母ちゃんへ。あおきっこ合宿とっても楽しかったです。ぼくがやりたいと言ったから5千円はらってくれてありがとう。この一週間はとてもいい思い出になりました。とちゅうで熱が出たけれどだいじょうぶです。父ちゃん家に帰ったら背中洗ってあげるよ。キャッチボールもやろう。ばあちゃん帰ったら水くれ手伝うよ。毎日きゅうりが食べられるようにいっぱい水をあげるよ。母ちゃん、合宿から帰ったらいっぱい教わった料理を作ってあげるよ。もちろん料理を作る手伝いもね。もちろん一週間分の野球の練習もね。7月の試合までにはすごい上手になるようにするからね。合宿中に作った料理はどれもこれもおいしかったです。(中略)でもぼくの家でたいたごはんの方がずっとおいしいです。はやく家に帰ってごはんを食べたいな。それから畑でとれた野菜を使ったおみそしるをいっぱい食べたいな。(中略)」これを書いた時のことはよく覚えていないのですが、今読んでみて、六年生の子どもがこんなに家族のことを考えたことはそれまでなかったのではないかと思います。家のことをよく考える機会になった合宿だったのだと思います。

次に父からの手紙です。整理の苦手な僕にしてはすぐ出てきました。当時、6年生ながらにすごく大切だと思ったんでしょう。ちゃんとしまっていました。「光太郎へ。みんなでがんばってやっていますか。今まではこんなに長く家を離れたことがなかったので、家の中は火の消えたようです。一週間大勢の人たちと共同生活を体験することにより、今後の光太郎に役に立つことがあると思うので、最後までやり抜くこと。土曜日に元気に帰ってくることを楽しみにしている。また風呂に行って背中を強く流してくれや」当時は感動もあまりなく、よくわかってなかったのですが、こんなに大切にされていたんだということが今だからわ

かります。今この歳になって振り返ってみて、学ぶことの多いためになった合宿でした。

教育長 お二人に話していただいて、やはり体験というのはすごいな、と改めて思いました。遅い子ども達が育っているなと感じています。次に保護者としてのお気持ちを小林さんにお話しいただきたいと思います。



小林さん 私には高校生と中学生の子どもがおりますが、小学生の時にはあおきっこ合宿や村内ホームステイに参加したり、児童センターを利用させてもらったりしていました。あおきっこ合宿中は、自分の身の回りのことはいちいち親に聞いたりできませんので自分で判断しなくてはなりませんし、学年の違うお友達と一緒に班になるのですが、問題の起きた時にはみんなで考えて一週間の団体生活を持続させていかななくてはなりません。とてもいい経験です。児童センターでは川や焚火などで子どもはすごく集中して遊ぶので、集中力や創造力、体力がつくと思っています。また、水曜クラブや村内ホームステイでは地域の方々と交流しますし、大学生とも接する機会が多いです。これは親や先生以外の様々なタイプの大人たちを知るととても良い機会です。そう思って子ども達には青木村での様々な活動に参加するように勧めてきました。現在のところ、正直どのような力が自分の子どもについているのかははっきりとは分からないのですが、5年10年たって、ここにいらっしゃる多田さんや若林さんのように遅く育ってくれるといいなと感じています。

一方で、テレビでは大学生がなかなか内定をもらえないとか、就職しても数年のうちに離職してしまうといった話を聞きます。社会力は本当に大切な力だと思っていますが、保護者としてはそういう話を聞くと、不安を感じてしまいます。実のところ、企業や社会ではどのような若者を望んでいるのかをお聞きしたいと思い、今日はこの場に参加させていただきました。

教育長 青木村での様々な経験は実際のところ将来どのように役に立つのか、社会はどのような力を持った若者を必要としているのかをお聞きしたいというお話でしたが、企業人として長らくご活躍で、また上田市の教育委員長さんとして教育に関わってこられた経験から西田さんにお話をお聞きしたいと思います。

西田さん 本日はお呼び頂き大変恐縮しております。青木の村松で機械の組立工場をやらせてもらっております。本社は上田原にあります。青木の歴代の村長さんや役場の皆さん、地主さんなど大変お世話になっております。感謝申し上げます。

上田市で教育委員をしておりましたが、青木村のスケールメリットを活かした、枠を乗り越えた教育の取り組みは素晴らしいと常々感心しておりました。上田市では真似のできない様々な取り組みです。

これからの時代は大変複雑で変化の速い時代です。グローバル化、価値観の多様化と合わせ、激しい時代になっていくでしょう。欧米人の考え方、隣国の人々の考え方、さらにはアラブの人々の考え方、非常に対応の難しい時代になってきています。どのようにこれからの社会を乗り切っていくかというテーマは、個人でもそうでしょうが、企業としても強く感じているところです。

そこで私がひとつ思うことなのですが、めまぐるしく変化している社会ではありますが、その時の一時的な価値観の変化に惑わされてその都度子育てを変えていくことは考え直さなければいけない、一時的な現象にとらわれないで子どもを育てたいということです。一例ですが、私が高校生の時に花形であった産業のいくつかは、大学を出るところには衰退し始めていました。子育ては色々な変化も乗り越えられるような芯のあるものでなければならないと思っています。



少し羅列をさせていただきますが、あまり小さくまとまった社員ばかりだと会社は発展していきません。出来上がった考え方をなぞるような単に成績が良いだけの人ではなく、枠に囚われず、若者の特権である自由な発想のできる人、またその発想を実現させるためのプロセスを構成できる人、さらに最後までやり抜く持続力、辛抱強く繋げていく胆力のある若者が企業を発展させていくと考えています。企業の70、80%は“ひと”なんですね。どういう人がどういう風に集まってくれるか、ということがその企業の命運を握っているのです。ただ、単に社会がこういう人を求めているから、企業がこういう人を求めているからというだけで子どもを育てないで欲しいと思っています。これは国がこういう人間を育てたいという現実にはいろいろと苦労してきた歴史がありますので、望ましい人の姿というものは他から与えられるものではなく、自分たちでその理想を探し求めて子育てに反映していくものではないかと思っています。

先ほど若いお二人のお話を聞いて素晴らしいと思いましたが、私がかの会社の集団の中とか人との関わりの中で、生きる力があると感じた人は、まず一番は明るくて明朗だということです。さらに開放的であるということ、行動力があるということ、積極性があるということ、率先して実行してくれるということ。加えて少々ワイルドで野性味のあった方が集団の中で力を発揮できると思います。また社員に時々話すことですが、物事を積極的に受け止めていただきたい。批判することや欠点を探すことは非常に楽で、短所を探して指摘することが頭の良い人と思いがちです。しかし物事を積極的、肯定的に受け止める姿勢が若い時は必要ではないかと思っています。スキルのことを申し上げますと、英語力、情報管理能力、団体行動能力、チーム力を挙げたいと思います。またこれらの基本になることとして運動能力もあります。スポーツで養われる精神力や思考能力は大切だと思います。

最後に申し上げたいこととして、少し話は飛びますが、逞しく生きていく力の前提は他を尊重する心、コミュニケーション能力に尽きるのではないかと思っています。いくら発想が良くても、賛同を得られなかったり実現できなければただの“絵に描いた餅”になってしま

います。そして自分の理想を実現するための一つのステップとして、礼儀と言葉遣い、他を思いやる心が大切ではないかと思っています。



教育長 色々な観点からお話しいただきましたが、いわゆる“いい子”ではなく逞しく生きていかれる青年が企業だけでなく社会で求められている、ただ他を尊重する礼儀はわきまえて欲しい、と教えていただいたと思います。ここで会場からご意見やご質問をお聞きしたいと思います。

保護者 社会力を育てるためには、自尊心や青木を誇りに思う気持ちというのが大切だと思うのですが、そのような気持ちを子どもに育てるには各家庭でどのようなことに気を付ければよいのかお聞きしたいです。

教育長 これは保護者にとって、切実で一番大切な問いだと思います。難しい問いではありますが、ここでまず、若者二人には、自分の社会力はどのように付いたのかも含めて、これからどのように将来に向かって生きていきたいかをお聞きしたいと思います。

多田さん 先ほどの紹介にもありましたように、私は小学生の時からスポーツ少年団で義民太鼓を続けています。家族がうれしかったことや悲しかったことを共有してくれたことは力になったと思います。武道館での練習でしたが、毎回家族に送迎してもらうことが必要でした。低学年の頃は、感謝の気持ちがあっても恥ずかしくてそれを伝えることはできなかったのですが、高学年になるにつれて自分一人では続けていられないことだと痛感する機会が多くなり、「お願いします」や「ありがとう」が口に出して家族に伝えられるようになりました。感謝の気持ちを伝えられるようになったことが大きかったと思います。

来年は社会に出ることになるのですが、教員を目指しておりますので、子ども達の目線にたって子ども達のやりたいと思うことを応援できたらいいなと思っています。

教育長 次に若林さんですが、村にかける思いとか、自分の自信はどうやってついたのか、という点でいかがでしょうか。

若林さん 自信はそんなにあるとは思いませんが、中学の時に国際交流事業でオーストラリアへホームステイに行ったんですね。その時に世界ってすごく広いんだと思ったのですが、日本に帰って、自分の、たとえばテストの点が悪かったとか野球でトンネルしちゃったとか、そんなことは世界規模で考えれば小さなことなんだ、ということは感じました。くよくよすることは少なくなりました。

仕事に関しては、役場の先輩たちは本当に皆さんものすごく頑張っていると思います。僕も負けたくないんで、先輩たちに負けないように一生懸命仕事をするというのが今の目標

です。

教育長 今日も会場にはたくさんの先輩たちがいらしてますが、こんな風に見られているんですね。これからも一緒に頑張りましょう。小林さんはいかがでしょうか。

小林さん 先ほどの西田さんのお話をお聞きして、保護者としてどうしたらいいのかを考えています。印象に残ったのは「コミュニケーション力」と「行動力」です。コミュニケーション力は表面的には言葉遣いとか礼儀として表れますが、内面的には思いやりであるとか相手を尊重する姿勢が大切であるということ。また、行動力は枠にはまらない自由な発想や力強さややり抜く力。どちらも子どもの芯のところの力ではないかと思います。先程、企業の要望に合わせて子育てをして欲しくないとのお話がありましたが、とかく保護者は目先のことに振り回されて、スキルであるとか HOW TO とかに目がいきがちですが、相手に合わせて準備するといった力ではなく、その子本来の、子どもの中から外に向かって出ていくような力、根っここのところの力みたいなものを育てていかなければいけないと感じました。それを考えた時に、家庭で出来ることは結構あるのではないかと思います。



先日、教育委員会で箕輪町に視察に行かせていただきましたが、小学校の校長先生が毎年保護者に問いかけをしていらっしゃる、というお話がありました。「子どもの話を聞いてあげていますか」「子どもを褒めてあげていますか」「子どものないところやできないことを探すのではなく、子どものよいところやできることを探してあげていますか」とお聞きして自分を振り返ってもらっているそうです。その時に、反省をしなければいけないな、大切なことだなと思って帰ってきたのですが、そういう毎日のひとつひとつのこと、毎日の子どもに向き合う親の姿勢が子どもの力強さの源になるのではないかと感じました。

教育長 多田さんが親に感謝している気持ちだとか、若林さんがお父さんの手紙を大切にしている感動しているとか、子どものそういう気持ちも含めて、家庭の在り方が問われるのではないかというお話でした。最後にまとめとして、西田さんに、青木村や、保護者、学校、教育委員会がこれからどうしていったらよいかについてお言葉を頂きたいと思います。

西田さん まとめと言われると非常に困るのですが、今までの経験などからお話しできればと思っています。

まず「教育とはいったい誰がするものなのか」「子どもは誰が育てるのか」という問いに対してですが、昔は“家庭が”“親が”とか“学校が”といったとてもシンプルな答えであったと思うのですが、社会がとても複雑になってきている中、その通りにはいかなくなってきた

います。教育には、家庭教育、学校教育、社会教育がありますが、その3つが力を合わせ、お互いに補完し合っていくことが大切ではないかと思ひます。そしてまず、それぞれのやるべきことは何かということに立ち返って考える必要があると思ひます。

最初に家庭教育ですが、一番大切なことは人間集団の中へ出ていくための躰を身に付けさせることだと思ひています。ここのところがきちんとできていないと、幼稚園や保育園、小学校へ進んだ時にいろいろ軋轢が生まれてしまひます。その時に特に大切だと思ひるのは幼少期の愛情のかけ方、お母さんが包み込むような愛情を持って子どもに接するということです。これは将来にわたる人間形成の上で非常に大きな要素を持っているとつくづく感じています。具体的には叱るより良いところを見つけて褒める、長所を伸ばすということが大切ではないかと思ひています。

学校教育で必要なことは、これはもう先生の熱意だと思ひます。先生の人間味あふれる熱意に子どもたちが共感してついていく、先生の生きざまが子どもたちの一生を支配する。スキル、知識学問も大切ですがその前提になるのはやはり先生の子どもに対する姿勢、熱意、ではないかと思ひます。



最後に社会教育ですが、これは予算を伴うことですが、行政の力だと思ひます。青木村がうらやましいと申し上げましたが、そういう意味で次世代を担う人たちを村として育てるということに行政の観点があることは非常に素晴らしいことです。

先程の家庭教育に話は戻りますが、では「躰とは何か」ということですが、ひとつには思いやりの心を育てるということだと思ひます。誤解を恐れずに申し上げれば、異性を大事にする気持ちを親がどういう風に教えるか、ということだと思ひます。これは両性の違いを理解するということでもありますが、違いを認識することから相手を尊重するという気持ちが生まれてくるのであって、それは生涯にわたって続いていくことだと思ひます。相手の性を理解するということは人類の一番基本ではないか、幼少期に夫婦でそれを子どもに示していくことが家庭のスタートではないか、思いやりの心を育てることの原点はここにあるのではないかと思ひています。

もう一つ、躰として大事に考えて欲しいことは整理整頓です。頭の中がきちんと整理されているということは学業に対してもとても大切なことです。それには身の整理整頓がどれだけきちんとできるかということではないでしょうか。

これらの、家庭教育で躰がきちんとできているかどうか、学校へ行って学力が伸びるものになるのではないかと思ひます。保護者への注文といひますか、お父さんお母さんしっかりやっってくださいよ、と言うことは、行政は非常に言いにくいようです。でもそんなことはないのではないかと私は上田市で申し上げてきました。学校教育を成功させるためには家庭教育がちゃんとしていて、家庭教育をしっかりさせるためには学校教育がしっかりしている必要がある。このような学校教育と家庭教育のお互いの影響を理解して展開させていくためには、相互の立場を説明し合うことが大切です。そこに躊躇はいらぬのではないかと思ひています。親の背中を見て社会力が育つ、と言いたいところですが、お父さんやお母さんの生活の仕方が社会力を育てていくのではないかと思ひます。子育ては自分育てです。

次に、少し今までの話と違う内容になりますが、私なりの考え方を述べさせていただきます。子どもたちの感性をどのように育てていくかということなのですが、子どもの時にしか育たない感性や美意識は、将来のアイデンティティに非常に関係してくることだと思っています。青木村の中で感じた光や風、青木村の景色の中でしか育たない感性とか美意識というものがあると思うのですが、それをしっかり確立していくことは、将来広い世界に旅立っていった時にすべての感じ方のもとになるものだと思っています。もっと広げていうならば、この青木の中でしかわからない人の情熱とか人の暖かさを意識していくこと、これらのことが非常に大切なことだと思っています。

この激動の時代、いろいろなかたちで身についたものを全部そぎ落として最後に残る中心のものは何か、自分のバックボーンは何か、と問われたときに、一人の人間としての中心軸やアイデンティティは必要だと思うのですが、それを育てるには感性とか美意識をどのように持ってもらうかが大事だと思っています。大人が子どもにどのような美意識を持たせることができるのか、各家庭でどのような美意識を持たせることができるかが大切だと思っています。これから広い世界に出ていく子どもたちに青木で育ったということを誇りに思ってもらうため、尽くせることを尽くしていかなければならないと思います。



教育長 アイデンティティを確立することが大切だということ、そしてそれは青木に誇りを持てる子どもを育てるということでもあるし、自分の家庭に愛情を持てるということでもあるだろうし、それは美意識を育てることであると聞かせていただきました。ありがとうございました。

今年は昨年のフォーラムを受けて、社会力育成事業が育てたものを若者からお聞きし、さらに社会を生き抜く力についてお話を伺いました。10年という伝統が今日のこのフォーラムを可能にしたと思っています。今後も、「青木の子は青木で育てる」を合い言葉にして多くの方のお力をお借りしたいと思っています。

先日、長谷川幸介先生の講演をお聞きする機会がありましたが、その時に「学校は学力をつけるところ」「家庭は自己肯定力をつけるところ」「地域は社会力をつけるところ」というわかり易いお話がありました。今日のシンポジウムでは「自己肯定感+躰」ということになるかもしれませんが重なるところが多いと思いました。

来年度以降、青木村の教育で考えていかなければいけないことの一つとして、この自己肯定感を育て躰を身に付けるということ、それらを育てるためにはどうしたらいいかの方法を探っていくこと、その方向が今日示唆されたように感じています。これからまとめをして、青木の教育をどうしていったらよいかに繋げていきたいと思っています。

編集後記 あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願いいたします。本号では昨年行われた「子育てフォーラム」の様子をお伝えいたしました。アンケート委員会の報告と分科会については、次号でお伝えいたします。

